

編集委員が選んだ本

『殺すこと／殺されることへの態度 二〇〇九年からみる日本社会のゆくえ』

石原俊／東信堂／2010年10月／980円（税別）
14のテーマを設定し、それぞれについてオピニオン誌がどのように取り上げているのか解きほぐしてくれている。著者は「<2009年>の日本社会を起点として歴史認識・社会認識のための補助線を引く作業」と、このブックレットを位置づけている。ページ数が少ないので物足りなさを感じる人もいると思うが、それゆえ教員にお勧めしたい。この本を読んでみて、時間と興味の度合いによって、筆者が紹介している雑誌に当たればいい。元の文章の初出は2009年だが全く古くない。なお著者は1974年生まれなので比較的若い論者と言えよう。今後も注目していきたい論者の一人である。

『リベラル再生の基軸 脳力のレッスンⅣ』

寺島実郎／岩波書店／2014年1月／2300円（税別）
近年の日本の「イスラエル化」は、米国にとっても「厄介な同盟国」になりつつあると警鐘を鳴らす筆者。2009年の保守長期政権からの政権交代への期待は、民主党の「疑似保守政党化」による妥協と変節によって裏切られた。本来あいまいだった「リベラル」は一段と空疎な響きの単語となってしまったが、そんなことに立ち尽くすことなく、しっかりとした「リベラルの再生」の基軸を再構築しなければならない、と主張する。世界認識と日本のあるべき未来の姿を、改めて希望を持って考えていきたいとの意を強くさせられる。

『主権者教育のすすめ 未来をひらく社会科の授業』

全国民主主義教育研究会／同時代社／2014年1月／2000円（税別）
「いまどきの若者は……」との嘆きは、数千年前からあるようだ。
しかし、こういう発想は的を射ていないだろうか。「考えようとしなさい」「無関心」とみえる生徒たちは、ひょっとしたら、学校での学びに疎外感を覚えたり、いまの政治や社会に無力感をいだいているのが本質ではなからうか。
逆に言えば、「学び、行動する喜び」を体験したら、彼らは生き生きと考え、関心を高めていくのではないか。
この本は、そういう教育実践を集めた。『総理大臣への手紙』『学校ぐるみの模擬投票』『生徒が学ぶ主体になる講義式授業』『アルバイト体験を教材に、生徒をつなぐ』……示唆に富んだ具体例が18実践載せられ、「どうしたらできるか」の案内も充実している。

『町村合併から生まれた日本近代 明治の経験』

松沢裕作／講談社／2013年11月／1600円（税別）
明治時代の地方制度の変遷について授業をする際、まず中央の機構について説明してから、付随的に触れるというのが一般的であろう。この本を読むと、逆に地方制度から中央の機構の変化や特質を描く授業展開のヒントが得られる。教科書では、制度は書かれても実態はほぼ示されていない。実態を踏まえて説明するならば必読である。特筆しておきたいのは、最初にページを割いている江戸時代の村の解説が簡にして要を得ていることだ。もちろん近代の説明に必要な部分に限って挙げているのだが、近世の身分制や組合村、土地制度などを知るのに適している。この説明を読んでから、この本の中で紹介されている参考文献にあたるのが良い。

『右翼と左翼はどちらがう？』

雨宮処凛／河出文庫／2014年3月／680円（税別）
レッテル貼りが行われると、わかったようなつもりになる。確かに便利だが、たいせつなものが抜けおちることも多い。
著者は、「右翼も左翼も、現状に不満や生きづらさを抱えるのは同じなのに、なぜやるのが違うのか？」という疑問から出発した。
そして、徹頭徹尾自分のアタマで考え、自分のコトバで表現した。両方の活動を体験した著者ならではの指摘が、訳知り顔の定義を超えた、本質の一端を射抜く。
じっさいに右翼、左翼と自認して活動している人への直撃インタビューも興味深い。

『少なくとも三兎を追い—私の県立浦和高校物語—』

関根郁夫／さきたま出版会／2014年4月／1500円（税別）
公立高校全国一の東京大学進学者を輩出し、グリーククラブ関東合唱コンクール金賞、ラグビー部全国大会出場など部活動に頑張り、学校行事にも全力で取り組む。
——このような浦和高校時代を築いた関根校長の果たした役割と仕掛けは何だったのか。生徒の頑張りや教職員・管理職が一丸となって前に進むと、明らかに変化が生まれてくる。その背景には、進学校とは言えない高校での校長体験も大いに生きていた。一つの方策だった「褒め励ますハガキ」は計7年間の校長時代に2万258通という。2013年7月から、「自助、共助、公助」をキーワードに埼玉教育を進める教育長に就任している。至る所に出てくる哲学・教養の言葉は考えさせられることが多い。

定価（本体200円＋税） 編集・発行 実教出版株式会社 代表者 戸塚 雄弐
2014年9月25日 印刷 発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5 Tel.03-3238-7777
2014年9月30日 発行 <http://www.jikkyo.co.jp/>